

平成 25 年度 第 2 回奄美・琉球世界自然遺産候補地科学委員会
議事概要（助言・要請事項等）

- ＜日 時＞ 平成 25 年 8 月 30 日（金） 14：00～17：00
- ＜場 所＞ かごしま県民交流センター 大研修室第 1
- ＜出席者＞ 土屋委員長、伊澤委員、石井委員、太田委員、岡野委員、尾崎委員、小野寺委員、芝委員、服部委員、宮本委員、山田委員、横田委員、米田委員
（欠席：久保田委員。事務局関係者は省略）
- ＜議 事＞ 1. 世界自然遺産推薦候補区域絞り込みのための検討
（1）推薦候補区域の絞り込みの考え方
（2）推薦区域絞り込みに必要な自然環境情報について
2. その他

＜概 要＞

○委員長提案（副委員長選任）について

- ・本科学委員会への副委員長の設置について土屋委員長より提案があり、副委員長の設置、米田委員（鹿児島大学名誉教授）の選出・就任を全会一致で承認された。科学委員会設置要綱については、次回委員会で副委員長の設置につき改定を行う。

○議事

議題 1. 世界自然遺産推薦候補区域絞り込みのための検討

（1）推薦候補区域の絞り込みの考え方について

- ・奄美・琉球の世界自然遺産推薦候補区域の絞り込みの考え方（案）について、事務局より説明を行った。

（2）推薦区域絞り込みに必要な自然環境情報について

- ・推薦区域の絞り込みに必要な自然環境情報として、評価基準に関して固有種数や絶滅危惧種数等、完全性の条件に関して植生自然度や森林の連続性等について事務局より説明を行った。また、現地調査を踏まえた IUCN 専門家の過去の指摘事項について事務局より説明を行った。

＜委員助言、要請事項等＞

－評価基準について－

- ・固有種数等の集計において、“固有種（亜種を含む）”としているが、固有種と固有亜種では価値に違いがあるので分けた方がよいのではないか。
- ・鳥類は留鳥の固有種・固有亜種に限定して集計しているが、渡り性の鳥類にも固有性があり、繁殖分布地が奄美・琉球のみの場合は重要であり、考慮が必要だろう。

- ・“遺存固有種”の客観的な判断のため、分類体系は重視しつつ、遺伝的距離による系統樹の情報が利用可能な種は、進化系統の情報を最大限に盛り込む努力をして欲しい。
- ・整理の仕方としては、種・亜種などの分類群に依拠するしかないのかとも思うが、生物多様性を重視した世界自然遺産と考えるのなら、重要なのは進化系統のパターンと数である。
- ・固有種や絶滅危惧種の種数を重視しているが、島の面積と種数は相関するため、この他に“種の密度”の捉え方も考慮すべきではないか。その際には単純に島の面積ではなく、土地利用を踏まえて種が利用可能な空間を考慮する必要がある。
- ・絶滅危惧種の重み付けは総合化の上で重要だが、結果が明確に出る一方で、客観的評価が埋もれないか。単純にランク別にポイントを与える以外に、他に方法はないか。
- ・IUCN レッドリストのランクによる重み付けと、系統樹（近縁種の有無）を合わせて評価する、Edge 分析という手法がある。IUCN のホームページで参照可能。
- ・候補地絞り込みの評価において、定量的な内容（例：種数、面積等）だけでなく、定性的な事象（例：捕食性の哺乳類を欠く奄美大島、徳之島、やんばるの生態系。野生のネコが生息する世界最小の島としての西表島、等）も重視して評価して欲しい。
- ・これから種数だけでなくどういう種類に焦点をあてて説明していくか絞り込みが必要になるが、奄美大島、徳之島、やんばる、西表島の4地域は非常に重要だと思う。
- ・中琉球は“大陸島における種分化の過程”の文脈で価値を説明できるが、（遺存固有種のいない）西表島は、同じ文脈の中での説明の位置づけを検討する必要があるだろう。

ー完全性の条件についてー

- ・今回は森林の評価に絞っているが、実際は水系に依存する種も多い。難しいが、水系を評価できないか。奄美・琉球の特徴として“湿潤な亜熱帯”の重要性を評価できるとよい。
- ・IUCN 専門家は現地視察時に、登録後の価値の担保の重要性を強調していた。外来種対策や保護担保措置の実現可能性という視点を考慮して、推薦区域を絞り込む必要がある。
- ・徳之島の森林はよく残っているが、周囲は耕作地で連続性が低い。しかし、水系は伏流水となり東シナ海側の石灰岩地の河川や海岸沿いの自然林の中に湧き出し、その周囲には希少植物も生育する。生態系の連続性を上手く説明出来ないか検討して欲しい。

ーその他ー

◆ 情報の交換・共有について

- ・更なる情報の集約ため、国、県、市町村、研究者の各々が有する調査結果等の情報交換が可能となる場・仕組みを検討して欲しい。

◆ 核心地域や緩衝地帯等の区域設定及び、奄美・琉球としての一体性等の考え方について

て

- ・奄美・琉球の一体性・連続性の中で核心地域と緩衝地帯をどう捉えるかは本質的議論であり、それを整理し、関係行政機関や科学委員会が、基礎的な共通認識として押さえておくことが重要。

- ・一般に、緩衝地帯は核心地域に隣接した周辺地域という認識。しかし、“大陸島における種分化の過程”で重要な周辺の島を、緩衝地帯とすることは可能か。

- ・森林に対する生活・生産の影響は大きく、昭和初期まではかなり山奥まで畑だったが、現在はかなり再生・回復している。動的な再生・生産力の極めて大きい森林をどう見るかが、核心地域と緩衝地帯の設定に関係するだろう。

- ・世界遺産としては奄美大島、徳之島、やんばる、西表が登録された時、それ以外の島も生物進化の場として貴重であることを我々は認識しているが、地域社会がどのように考えるかは重要だ。例えば宮古諸島には遺存固有種がいるが認識されておらず、陸域は外来種の影響を受けており、危惧している。遺産登録から漏れた地域の保全についても科学委員会で発信していくことが重要だ。

◆ 海域の取り扱いについて

- ・海域に関する議論がこれまで無い。海域の既存登録地について勉強しつつ、奄美・琉球の海域も対象になるか検討すべき。

議題2. その他

- ・第3回科学委員会は、11月から12月にかけての開催で調整する。